なみとも共通するところがあったが、この道をふたりは、敬虔な気持ちも、神や魂に対する信仰もなしに歩いていた。それどころか、彼岸とか来世とかいうことすら信じていなかった。ふたりはあくまでこの世の人間としてこの道に足を踏み入れ、この世の人間としてこの道を進んでいた。そしてこれこそまさに注目すべきことだったのである」（MoE 761）。周知のとおりこの旅は、作者によって挫折すべく運命づけられていた。終結部ではウルリヒも、一九一四年八月の戦争勃発を、あらゆるアンビヴァレンツからの救済として歓迎することになっていた。そのような軍事的動員と同時に、性的な動員も同時に起こるというのが、予定されていた結末だった。第一部で描かれた、いたるところに見られる欲動の停滞、充分に展開されなかった登場人物たちのあらゆる欲求は、「一種の終わり」というサブタイトルのもとで、セックスと狂気と暴力の集団的エクスタシーという結末を迎えるはずだった。[93]「すべての線は戦争に流れこむ。誰もが自分なりのやり方で戦争を歓迎する」（M II/2/15, MoE 1902）。

ただしムージルの『特性のない男』ほど、《歴史小説》と無縁なものはない。「現実に起きた出来事の現実的な説明に興味はありません。わたしは記憶力がよい方ではないですし、事実とはそもそも常に交換可能なものです。私の興味をひくのは精神的に典型的なものです。いや思い切って、出来事の幽霊的側面（das Gespenstische）と申し上げたい」（P 939）。だからムージルの小説は、一九一四年に戦争は勃発せざるをえなかった、などとは書か

93　Walter Fanta: Krieg & Sex - Terror und Erlösung im Finale des "Mann ohne Eigenschaften". In: Hans Feger/ Hans-Georg Pott/ Norbert Christian Wolf (Hg.): Terror und Erlösung. Robert Musil und der Gewaltdiskurs der Zwischenkriegszeit. München 2009, S. 209 - 225 (Musil Studien 37) 参照。